

恐怖管理理論における死と宗教

——宗教は死の不安の緩衝なのか

イーリヤ・ムスリン

一 本稿の目的とアプローチ

恐怖管理理論 (Terror Management Theory、以下TMTとも) は、文化人類学者E・ベッカーの思想を経験的に検証及び体系化しようと、アメリカの実験心理学者のJ・グリーンバーク、T・ピジンスキ、S・ソロモンが八〇年代の半ばより現在まで展開させてきた社会心理学理論である。² TMTは、ここ二五年ほどの間に、着実かつ粘り強く調査と研究が積み重ねられ、宗教研究を含めた、心理学・文化研究・教育学など数多くの学問領域に多大な影響を及ぼしている。本稿は、この学派による最近の宗教に関する一連の学術論文を中心に、その宗教の捉え方や死と宗教の関係に関する考え方を分析し、その宗教研究における進展に注目しながら、この理論における現段階の問題点を考察することを目的とする。従来の心理学系宗教理論における死と宗教に関する捉え方を整理し、批判的検討を行うことで、現在日本で理論的な体系化が進む死生学にひとつの貢献を成すこ

とを目指したい。その際、死の不安の多面性や複雑性を指摘する心理学研究を念頭に置きつつ、宗教の多様性を特に意識し、研究者の宗教概念を問いながら自文化中心的な態度とは距離を置く宗教学的な立場から論じていく。

二 恐怖管理理論の宗教研究における展開

恐怖管理理論は、死の不可避性に対する意識が人間の生き方に与える影響を考察しながら、死の不安と文化及び自尊心との相互作用に注目する理論である。その観念的・理論的基盤は、ベッカーのほかに、J・R・リフトン、O・ランク、G・ジルボーグ、S・フロイト、J・ボウルビーなどの心理学の議論にある。TMTによれば、人間は将来の状況を想定できる認知的能力を備えているため、ほかの生命体と異なつて自らの有限性を意識できる。死の不可避性に対するこの意識は、進化過程において発展してきた自己生存確保への本能や傾向、また不死への願望と連なつて、死への恐怖 (fear) の可能性を生み出し、それは恐怖を管理する機能を持つた世界観の発展と維持、及び自尊心の追求に繋がっている³⁾。

理論の発足以来、TMT学派は死の不安の機能を特定するための様々な内容の実験を行いながら、その正確性を向上させてきている⁴⁾。だが数年前まで、宗教を対象を絞った調査は比較的少なかった。こうした印象はこれまでのTMT学派の傾向を踏まえるとさらに強くなる。彼らが死の恐怖の普遍性を強調し、それへの対応が人間行動の背景にある最大の原動力だと論じる際、その証拠として引き合いに出されるのは、大方の宗教が来世に関する教えを提供するという点である。宗教研究に関する扱いが比較的少ない主な理由として、研究者自身の関心と、基本的に宗教学者としての実践と教育を受けていないことが考えられる。TMTの提唱者である

三人やその同僚の関心は、主に自尊心・世界観・死の不安を結びつける認知的な仕組みの説明、個人・集団における攻撃性、異文化・他集団・他者に対する偏見、または差異の維持などの背景にある心理的動機の解明に向けられている。しかしながら、八〇年代後半から今世紀初頭にかけては、例えば被験者が死関連の刺激を受けた状態で、その文化あるいは共同体の規範への挑戦・違反となる行為や所属する人種・国家・民族・集団のアイデンティティを侮蔑する行為に対してどのような反応をするかを特定するなどという、必ずしも宗教が中心でない調査が多かった。とはいえ、TMTの実験の多くは、直接宗教者を対象としないものであれ、アイデンティティや攻撃性や差別の解明への貢献を通して、初期の頃から（宗教に関するものを含む）衝突や紛争の背景に一般的に存在すると考えられる心理的なメカニズムの理解に有効な手掛かりを提供している。

とりわけ宗教紛争がTMT論者の注目的になったのはアメリカの同時多発テロがきっかけだった。テロの理解に関する関心や努力が急騰するなか、ピジンスキ、グリーンバーグ、ソロモンは、それまでの自分たちの研究活動を整理し、死の不安と文化的世界観の繋がりを中心としたTMTの視点から、エスカレートする宗教紛争とテロ後のアメリカ国民の行動を説明する『九・一一の後に——テロルの心理学』⁵を出版した。この著作は、多数の綿密な専門的な心理学調査を紹介すると同時に一般の読者にも理解できるように書かれていたが、宗教を大きなテーマとして取り上げたにもかかわらず、序論におけるナイーブな一般論に聞こえるような宗教全般に関する記述、専門性を欠いた宗教に関する文献の引用という宗教学専門家には賛同できないと思われる部分があった。⁶

他方、この時期から、宗教信仰のみに集中し、その不安緩衝としての機能を経験的に確かめようとした重要なTMT実証研究が登場する。デクスネ他やヨナスとフィシャーの研究である。⁷前者はアメリカとオランダの被験者を対象とし、来世に関する宗教信仰が死の不安を緩和することを示した調査であり、後者は、内発的な

信仰を持つ者はそうでない者よりも死の不安が低く、内発的宗教心が死の不安の管理に効果的であるという結果を得たドイツの調査である。宗教を含めてTMTのテロと紛争への関心が強まるにつれ、アメリカ合衆国とイスラム教圏の信者を対象に、宗教と政治的な対立に繋がる心理的メカニズムや紛争の心理的解消方法に関する調査が活発に積み重ねられていく。二〇〇八年からはこれ以外の問題も扱う、宗教を主たる対象とする研究が次々と発表された。そして二〇一〇年には、従来なかった宗教全般についての徹底した理論的考察を含む論文が発表された。¹⁰ ここではTMTの宗教の捉え方と共に、進化心理学・愛着理論など、ほかの心理学系理論が生み出した宗教論とTMTの類似点ならびに相違点が論じられる。以下ではこの著作を中心に恐怖管理理論における宗教論を考察する。

三 恐怖管理理論の宗教論

恐怖管理理論の宗教論は、とりわけ死の不安・恐怖と宗教信仰の關係に注目する機能主義型理論である。その最新の論文でTMT論者は、自らのアプローチを「宗教信仰を、粘り強く、かつ浸透している死の問題の解決として捉える伝統を受け継いでいる」ものと位置づける。¹¹ そして宗教が、人間の置かれている世界を説明し、不確実な運命や天災など自力でコントロールできない出来事に対する有能感、社会的連帯感などを与えるように機能していることを認めつつ、「宗教信仰のとりわけ重要な機能とは、人間の死に対する意識に由来する潜在的に圧倒的な大恐怖を抑えることである」と主張し、宗教が、「心理的な安心感と不死への希望を持たせることで人間独自の死の意識に由来する潜在の大恐怖を管理するように働いている」と強調する。¹² 加えて、TMTの議論を信仰と死の不安に関する調査の理論的な出発点としたヨナスとフィシャーは次のように述べている。

「恐怖管理理論によると、すべての文化的世界観は死の恐怖の管理を手助けするが、大抵の宗教でその中心を成すのは死を超越する信仰であるから、来世への信仰を勧めることによって死の恐怖を和らげるという点は、宗教の中心的な機能だと言えるだろう」¹³。

死の不安の緩衝としての具体的な働き方について、恐怖管理理論は次のように考える。人は死を意識的に考える際、死の脅威に対応するために、より健康を守ろう、あるいは危険な行為を回避しようというような具体的で現実的な行動を取るか、抑圧や否定のような現実を歪曲する近位防衛機制を用いる。しかし、無意識のレベルで死の不安を緩衝する遠位機制として機能するのは「文化的世界観」と自尊心である¹⁴。宗教を含めて文化的世界観は、国家や宗教団体のような永遠とされる象徴的現実世界のなかに、個人を価値ある貢献者として位置づけ、それによって個人に「象徴的な不死」を与える¹⁵。ただ、宗教が世俗的な世界観とは異なる点は、宗教が特に強い安心感を与えてくれるような文字通りの不死を約束することである。「世俗的と宗教的信念には類似点があるとはいえ、宗教的世界観はほかにない強力な存在的な安心感を提供する。まさしく、死の恐怖への解毒剤といえば、宗教ほどのものはないだろう」¹⁶。また、別の著書においてTMT論者は文字通りの不死を約束していることが「疑いもなくほとんどすべての宗教の主な魅力である」と述べている¹⁷。

このようにTMTは宗教と死の不安の間の親和性を断定するわけだが、その理由を宗教信念の特質のなかに見出している。「宗教信仰は、包括的で、簡単に反証できない観念に基づいており、なおかつ文字通りの不死を約束するために、死の不安を緩和するのに特に相応しいものである」¹⁸。そして、文字通りの不死と象徴的な不死の追求の背景にある心理的動機とは、「死が絶対的な自己消滅を意味するのを否定したい」という点である。また、TMT論者は、多くの宗教のなかで出血、排泄、病氣、身体の衰えなどのような自己の衰退と死を連想させる要素が、汚らわしいあるいは崇高な魂より価値の低いものとして見なされ、個人の動物的な性質が

拒絶されていることには自己消滅の否定の現れを見ている。¹⁹さらに、死を連想させられた状態で宗教者が神や仏など超自然的な存在への信仰を強めたという現象を確認した研究の結果を受けて、超自然的な存在が「不死への門番」であると述べられ、こうした存在への信仰も自己消滅の否定と不死への願望と結びつけて考えられる。²¹

ここまで見てきたように、TMTの議論において、宗教全般は自己消滅への恐怖の究極の緩衝あるいは解毒剤として捉えられており、死の恐怖を緩和する機能は宗教の中心的特徴で、主たる魅力として見なされている。そして、人が宗教に傾く主な無意識的（場合によって意識的な）動機は自己消滅に対する恐怖と死ぬ運命であることを否定したい気持ち、つまり不死への願望である。

ベッカーの思想にも見られるこの基本的な宗教の捉え方はTMTの発足より一貫して維持されていると思われる。だが、ここ数年のTMTの宗教研究には、宗教を対象とする実証調査の増加とより徹底的な宗教論の理論的な整理のほかに、宗教性へのより敏感なアプローチや原理主義への関心の高まりが見られると言える。例えば、フリードマンとロールズ（二〇〇七）及び（二〇〇八）は、明確で揺るぎない世界観及び来世への信仰の具体性を原理主義者の持つ信仰の著しい特徴として挙げ、原理主義的な信仰が死の不安を抑えるのに特に有効だという三人の理論提唱者の考えを受け継ぎながら、原理主義者とそうではないキリスト教徒における死の不安を測定している。²²それによると、死を想起させられた時に聖書を字義通りに信じたり、自宗教の完璧な正当性や的確性を主張したりするなど、原理主義的信念を持つ信者の間では信仰による死への不安の緩衝効果が強い。また、ほかの信者よりも、国家やスポーツチームとの同一化など、世俗的な内容の死の不安に対する防衛機制を利用することが少なく、自らの死について書いた文章が他の被験者のそれよりポジティブなものである、等が示される。²³その理由は、自己消滅を否定する強固な来世や再生の信仰が信者に「死を受けやすくし、

安心感を抱かせて死の熟考を可能にする」からである。²⁴ 他方、治療を拒否しがちなキリスト教原理主義者の医療に対する態度に焦点を当て、そこから宗教世界観と意味追求及び死の恐怖との間の関係を調べた研究がある。そこでは、死を連想させられた時にこうした信者が、自己や肉親の死に繋がりを治療拒否に賛成する態度を強めたという結果が示された。つまり、死に関連する刺激を受けた時にこれらの被験者は逆説的にも死を招くような態度を強めたわけであるが、TMTの立場からして、治療拒否は彼らの宗教的な世界観の重要な部分であり、意味の源泉であるために、自らの世界観と意味へのこだわりを強化したという点では理論の予測の範疇にある。すなわち、死を招くような態度に出たとはいえ、永遠の命を約束し自己消滅を否定する宗教へのこだわりを強めたことで、これらの被験者は実際、無意識にも、不死への願望と自己消滅の否認を強めた²⁵と見なされる。その他、個人の宗教に対するアプローチを表す基準である「宗教志向性」と死の不安の関係を論じるペール三世²⁶も、原理主義信仰における人種的偏見、自宗教中心性や軍事主義への傾向を批判しつつ、原理主義的な信仰が有する死の不安からの保護力を取り上げている。

強い原理主義への傾向とは別に、これらの研究者が死の不安を緩和する上で有効な志向性として見なすのは高い内発的な宗教心と高い求道心である。つまり、内発的な宗教心の高い人は比較的是っきりした意味や人生目標を持っており、人生への満足も持ちえているため、こうした不安から守られている。また、高い求道心を持つ人間は、自分と異なる世界観を持つ者を脅威としては考えず、死に直面した時にその意味を見出すことができるために、死関連の刺激に比較的うまく対応するという。²⁶

以上のように、恐怖管理理論を枠組みに、宗教信仰と死及び自己消滅への不安・恐怖を関連付けて検討する実証調査では、内発的・外発的動機による宗教心、原理主義的な傾向を持つ宗教心の強弱、求道心の高低といった、宗教性の様々な側面を検討する動きが出ている。

四 恐怖管理理論の宗教論における問題点

恐怖管理理論は、死の不安の働き、価値観の維持、自尊心の取得と機能、文化的・イデオロギー的な他者の扱い、偏見の形成、紛争とテロの背景にある動機など、幅広い心理的・社会的現象の説明に努めており、成果をあげている。この理論は、死の不安と自分の信念・価値観への固執の間に非理性的、非論理的な関係が存在することを指摘し、それによって、他宗教の受容、他者の信仰や宗教実践に関するわだかまりと違和感、あるいは宗教紛争の背景にもある心理的な仕組みといったものの理解に有効な手掛かりを提供するなど、宗教研究にも少なからぬ貢献をしている。とはいえ、その人間の動機や行動についての捉え方に問題点がないわけではなく、心理学の分野においては、死の不安を強調しすぎた、あるいは自尊心を唯一の心理的欲求に据えた還元主義的な人間動機付け理論として見なされることが少なくない。そのためTMTは、自己成長や自己実現を無視しがちである点、死の不安の過剰な重視、自尊心の精神的な生活における役割の捉え方、生物学的進化や自己保存への本能に関する見方などといった問題点について批判を受けている²⁷。ここではこの理論の宗教、及び死の不安の捉え方に関する諸問題に的を絞って論じていきたい。

まず、恐怖管理理論の宗教と死の不安に関する研究は確かに最近ますます細微になっており、具体性を増しているが、宗教の大枠の理論的な捉え方には変わりがないように見える。つまり、この理論は依然として宗教という現象を死の不安への緩衝あるいは解毒剤として一義的に捉えているようである。確かに、多くの人は自己あるいは大切な他者の死に対する不安や意識的・無意識的な不死への願望から宗教に傾き、宗教教理と実践の一部が死の不安を緩和するように機能するだろう。だが、来世での処罰や悪死霊などに由来する宗教特有と言える不安を引き起こす教えが存在し、キリスト教、仏教、神道の伝統にもあるように、積極的で厳密な宗教

実践を促すために死後の運命の不確実性、死の恐ろしさ、あるいは死体の腐敗や穢れを意図的に強調することで信奉者のなかに死関係の不安を組織的に高めようとする宗教があることを見逃すべきではないだろう。

そして、宗教信仰や実践と死の不安の間の関係を調べた宗教心理学の実証研究に目を向ければ、互いに相反する結果が出ている現状もある。例えば、A・L・バーマンは、命が危険に晒されている状況下では、他界を信じる人も信じない人も同様に不安や恐怖を感じたりパニックに陥ったりすると特定し、ここから、生命の危機に晒された時の反応や感情と他界への信仰との間にはこれといった相関関係はないという結論を導いた。²⁸ H・ファイフェルとA・B・ブランスコムは、意識下のレベルでは宗教心を持つ人も持たないものどちらも同様に死を恐れているという結果が出ている。²⁹ また、別の調査では、内発的動機付け／外発的動機付けの基準を応用しても、内発的動機による宗教心を持った者と宗教心のない者とは、死の恐怖という点ではほとんど変わりが無いという指摘がある。³⁰ この調査では、天国へ召されると信じているにもかかわらず死を恐れるという被験者の例も出ている。³⁰ さらに、三〇三人の日本人大学生を対象とした研究では、宗教に好意的な態度を有する者は概して肯定的な死観を持つものの、「宗教は死の不安を軽減させる」という仮説は検証されなかった。³¹

しかしながら、D・マーティンとL・S・ライツマンは、積極的に教会に通ったり、宗教的行事に積極的に参加したりする者は、そうでない者よりも死の恐怖が弱い傾向にあると述べている。³² R・D・カホーとR・F・ダンは、G・W・オルポートとJ・M・ロスによる内発的動機付け／外発的動機付けの基準を採用し、内発的動機を持ったプロテスタントやカトリックの宗教心と死の恐怖は逆相関であると指摘する。³³ 「内発的動機を持ち、かつ献身的」(intrinsic-committed)と「外発的動機を持ち、かつ黙認する」(extrinsic-consensual)という類型論を用いたB・スピルカ他の研究によると、内発的動機を持つて、かつ献身的である人は死後への不安

が少なく、死そのものを自分の勇氣、威厳、人生の意味などの再確認の機会として前向きに捉えている一方、外発的動機を持つて、かつ黙認する者は死に対してマイナスなイメージを持つていたと言う。³⁴ H・ファイフェルとN・V・ナージュは、宗教心を持つ者の死の恐怖が持たない者のそれより程度が低い、という死の恐怖と宗教心のネガティブな相関性を報告する。³⁵ 一八歳から八八歳の三四六人の対象者における死の不安と宗教心の繋がり調べたJ・A・トーションとF・C・パウエルは、内発的な宗教心の強い者はより少ない死への不安を示すという結果を提示した。³⁶ またK・A・アルバラード他は、二〇〇人の調査対象者のうち、宗教心が強く来世への強い信仰を持つ人は死関連の不安・鬱・動揺が低いという結果を発表している。³⁷ さらに二〇〇二年にリトアニアで行われた研究では、内発的宗教心を持つ対象者が示した未知への恐怖（死後への恐怖）は、外発的動機による信仰を持つ者や無神論者よりも低いという、結論が出ている。³⁸ エジプトで行われた調査では、宗教心を持つ若齢層の対象者が死によつて感じる動揺（死への不安、死に関連した憂鬱及び妄想を含む用語）を検討した結果、宗教心が死への不安と憂鬱と反比例するという結果が報告されている。³⁹

しかしこれとは逆に、I・E・アレクザンダーとA・M・アルダースタインは自らの調査によつて、宗教心を持つ者は幼児期の早い段階で死を意識するようになり、大人になつた後には普段においても非宗教者よりも死を意識しているという結論に至つていた。⁴⁰ H・ファイフェルが行つた、宗教心を持つ／持たない健康な人及び宗教心を持つ／持たない、病気の末期患者へのインタビューを通じた意識調査によると、全体として、宗教心のある者の方が死を恐れている。また最近では、死に対する態度の総合的な研究として、宗教心・性別・結婚の有無など複数の要因とその影響を分析したカナダの研究があり、宗教心の強い者は死後の未知の世界をそれほど恐れないとはいへ、信仰をあまり持たない者よりも死者や自己消滅を恐れるという結果が出ている。⁴¹ J・デズッター他は、四七一人のベルギー人を対象に、宗教心を持つ者の方が持たない者よりも一般的により

素直に死を受け入れる傾向にあるが、宗教教理を字義通りに信じる者は死の不安が無神論者より大きいと発表している。⁴³

確かに、宗教心及び死の不安の捉え方や測定の方法に関する方法的な相違の影響が異なる結果を導くことはあり得るが、ここに挙げた結果を踏まえれば、概してはつきりとした死の意識・不安・恐怖と一般的な宗教信仰・実践の間の一方向的な繋がりを認めることは難しいと考えざるを得ない。したがって、全般的な宗教の不安に対してどう機能しているかという議論よりも、特定の宗教的信念・信仰もしくは実践が、特定の宗教団体あるいは個人においてどう機能しているかについて論じる方が有意義であるように思える。また、そのような一方向的な繋がりが存在しないとすれば、死の不安の機能に基づく一般的な宗教理論を主張するのは困難になり、TMTの宗教論は一部の宗教あるいは宗教心の理論になってしまいうだろう。もちろん、TMTが主張するように、心理学的な実証調査のなかで宗教信仰の不安緩衝としての効果を確認した研究は多く存在する。だが、それとは異なる結果を提示する研究も少なくなく、そのなかには内発的な動機または聖書を字義通りに信じる（固い原理主義的な信仰を持つ）者でもそうでない信者や無神論者より大きな死の不安を見せるという結果もある。そのため、TMT論者は、自らに不都合な結果を示す研究さえも徹底的に調べ、その対象や方法に対して丁寧に反論する必要がある。しかし最近の論文においてペール三世他は、死後の生への信仰が死の不安を抑え、死を受け入れやすくするという自らの主張を支持するものとしていくつかの実例を列挙するが、そのような繋がりを確認できなかった、あるいはそれを否定した研究には言及しない。⁴⁴ 同論文の別の箇所でもM・オサルチュクとS・J・タッツによる調査が挙げられ、来世を信じる人が死を想起させられた時に来世への信仰を強め、それによって来世への信仰を持たない者よりも死への不安を抑えることができたという効果が確認されたことが述べられるが、この調査結果を再確認する研究を行ったR・オクスマンが同じ結果に至らなかった

たことには触れないのである。⁴⁴

一方、宗教教理の多様性と具体的な集団や個人の信仰における差のみならず、自己の死や大切な他者の死に対する不安、また自己の死に関して言えば、死にゆく過程に対する不安、生の途絶に対する不安等、ひとえに死の不安といってもその様々な具体的な側面にも注目する必要がある。例えば、心理学者や哲学者は死への不安の一次元として死後への不安を取り上げているが、TMT論者はこの種の不安を視野に入れていないようである。実際のところ、死の不安・恐怖を多面的に捉え、その様々な側面を細かく定義した研究は決して少なくはない。⁴⁶

加えて、ターミナル患者における信仰と死の恐怖をTMTの理論を応用して調査したD・エドモンドソン他は、信仰を持つ者が自らの死に際して、神に見捨てられた、あるいは罰せられたなどと、TMT議論で信仰が提供すとされる、死の恐怖からの緩衝そのものを破るような失望感や悩みを抱えてしまう場合があると留意を促している。また、宗教信仰による内面的衝突が、死に向かう者の不安を増大させたり鬱病を悪化させたりすることを示した研究を取り上げながら、TMTの方法を採用する研究には、自己の死を想起させる継続的な刺激に晒された信者における信仰の不安緩和機能を、実際に経験的に確かめた研究が極めて少ないことを指摘する。⁴⁷ この研究は、宗教的世界観が死の恐怖を抑えられない条件を特定することによってTMTの信仰に関する一義的な捉え方に疑問を投げかけたこと、また健康な大学生を対象に研究室で調査を行うというTMTがしばしば用いる研究パターンを脱出する必要性を示したという意味で、貴重なものである。したがって、対象者が死に関する文章や映像によって刺激されるという設定とは別に、臨床の場のような死の脅威に身体的に晒されているという状況下での、異なる年齢・性別・職業の人間における宗教信仰の機能を調べたTMT研究を積み重ねていくことは今後のTMTの課題となってくるはずである。

五 結論

近年、恐怖管理理論は様々な批判に呼応するなかで、人間の成長や自己拡張、意味論や愛着理論の要素を吸収しながら、死の恐怖の管理と意味との関係、あるいは他者との関係性が恐怖管理に与える影響などという新たな視点を導入しており、徐々にその体系は複雑化し、精度も高まっている。宗教に関して言えば、近年ではより多面的に宗教性を捉えるように実証研究が行われ、最近の論文では以前より高度な議論が進められ、その宗教論の理論的な土台も固まりつつある。また、同時に宗教原理主義や紛争などの背景にある動機に関しても貴重な成果がもたらされており、一層大きな可能性が感じられる。しかしながら、近年は従来以上に宗教志向性を基準にして死の不安と宗教心の関係を検討することで幾分説得力の欠けた宗教の一般論も少なくなり、具体性を高める方向に動き出しているとはいえ、TMTが具体的な信仰の内容及び信者が置かれている具体的な状況に十分配慮しているとは依然として言い難い。包括的な宗教の理論を目指すのであれば、独自の立場から今まで以上に宗教体験や実践を取り扱い、宗教の教理や信仰における多様性をより強く意識せねばならないだろう。例えば、宗教信仰が持つ死の不安の緩衝としての普遍的な機能を主張するにしても、キリスト教、イスラム教などの一神教以外の文化圏における宗教信仰と死の不安・恐怖の管理の関係についても取り上げ、自らの議論に沿った数多くの成果を提示することなしにそれは難しい。実際にTMT宗教論の要であるこの主張が確認されなかった先行の研究にしても、それに関するより徹底的な考察と丁寧な議論が求められよう。そして、死の不安という概念そのものについても、様々な種類の死の不安、多様な条件のなかの自己死・他者の死に関する検討とともに、さらなる精緻化が必要になってくるはずである。

■註

- 1 Becker, E. (1971/1962). *The Birth and Death of Meaning*, New York: Free Press; Becker, E. (1973). *The Denial of Death*, New York: Free Press 及び Becker, E. (1975). *Escape from Evil*, New York: Free Press 参照。
- 2 Greenberg, J.; Pyszczynski, T. and Solomon, S. (1986). "The causes and consequences of a need for self-esteem: A terror management theory," in R. F. Baumeister (ed.), *Public Self and Private Self* (pp.189-212), New York: Springer-Verlag.
- 3 Greenberg, Pyszczynski, and Solomon, op. cit.; Solomon, S., Greenberg, J., and Pyszczynski, T. (1991). "A terror management theory of social behavior: The psychological functions of self-esteem and cultural worldviews," in M. P. Zanna (ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 24, pp. 93-159), San Diego: Academic Press 45-50°
- 4 実験の内容や科学的手順に関しては、拙稿 (2009) 「近年の心理学理論における死と宗教——恐怖管理理論の批判的考察」『東京大学宗教学年報』二七号、八七—一〇二頁参照。
- 5 Pyszczynski, T., Solomon, S., and Greenberg, J. (2006/2003). *In the Wake of 9/11: The Psychology of Terror*, Washington, DC: American Psychological Association.
- 6 詳細は拙稿「近年の心理学理論における死と宗教——恐怖管理理論の批判的考察」九〇頁参照。
- 7 Dechesne, M., Pyszczynski, T., Arndt, J., Ransom, S., Sheldon, K. M., Knippenberg, A.V. and Janssen, J. (2003). "Literal and Symbolic Immortality: The Effect of Evidence of Literal Immortality on Self-Esteem Striving in Response to Mortality Salience," *Journal of Personality and Social Psychology*, 84(4), 722-737. Jonas, E. and Fischer, P. (2006). "Terror Management and Religion: Evidence That Intrinsic Religiousness Mitigates Worldview Defense Following Mortality Salience," *Journal of Personality and Social Psychology*, 91(3), 553-567.
- 8 本稿では紙幅上のLIMITにおける宗教紛争という点に関しては扱わないが、詳しくはFischer, P., Greitemeyer, T., Kastenmuller, A., Jonas, E. and Frey, D. (2006). "Coping with Terrorism: The Impact of Increased Salience of Terrorism on Mood and Self-Efficacy of Intrinsically Religious and Nonreligious People," *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32 (3), 365-377. Pyszczynski, T., Abdollah, A., Solomon, S., Greenberg, J., Cohen, F. and Weise, D. (2006). "Mortality Salience, Martyrdom and

Military Might: The Great Satan Versus the Axis of Evil," *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32 (4), 525-537; Pyszczynski, T., Abdollahi, A., Greenberg, J., and Solomon, S. (2006). "Crusades and Jihad: An existential psychological perspective on the psychology of terrorism and political extremism," in J. Victoroff (ed.), *Tangled roots: Social and psychological factors in the genesis of terrorism* (pp. 85-98). Amsterdam: IOS Press; Pyszczynski, T., Rothschild, Z., Moryl, M., and Abdollahi, A. (2008). "The cycle of righteous destruction: A terror management theory perspective on terrorist and counter-terrorist violence," in W. G. K. Stritzke, S. Lewandowsky, D. Denemark, J. Claire and F. Morgan (eds.), *Terrorism and torture: An interdisciplinary perspective* (pp. 154-178), Cambridge University Press; Pyszczynski, T., Rothschild, Z., and Abdollah, A. (2008). "Terrorism, Violence and Hope for Peace: A Terror Management Perspective," *Current Directions in Psychological Science*, 17 (5), 318-322; Vail, K. E., Moryl, M., Abdollahi, A., and Pyszczynski, T. (2009). "Dying to Live: Terrorism, War, and Defending One's Way of Life," in D. Antonius, A. D. Brown, T. K. Walters, J. M. Ramirez, and S. J. Sinclair (eds.), *Interdisciplinary Analyses of Terrorism and Political Aggression* (pp. 49-70). Cambridge Scholars Publishing 学芸堂。

6 Friedman, M. and Rholes, W. S. (2008). "Terror Management Theory and Religious Fundamentalism," *International Journal for the Psychology of Religion*, 18, 36-52; Edmonson, D., Park, C. L., Chaudoir, S. R., and Worman, J. H. (2008). "Death Without God: Religious Struggle, Death Concerns, and Depression in the Terminally Ill," *Psychological Science*, 19, 754-758; Hayes, J., Schimmel, J., and Williams, T. J. (2008). "Fighting Death With Death: The Buffering Effects of Learning That Worldview Violators Have Died," *Psychological Science*, 19 (5), 501-507; Vess, M., Arndt, J., Cox, C. R., Routledge, C., and Goldenberg, J. L. (2009). "Exploring the Existential Function of Religion: The Effects of Religious Fundamentalism and Mortality Salience on Support for Faith-based Medical Intervention," *Journal of Personality and Social Psychology*, 97, 334-350; Rothschild, Z., Abdollahi, A., and Pyszczynski, T. (2009). "Does peace have a prayer? The effect of mortality salience, compassionate values, and religious fundamentalism on hostility toward out-groups," *Journal of Experimental Social Psychology*, 45 (4), 816-827.

10 Vail III, K. E., Rothschild, Z. K., Weise, D. R., Solomon, S., Pyszczynski, T. and Greenberg, J. (2010). "A Terror Management Analysis of the Psychological Functions of Religion," *Personality and Social Psychology Review*, 14 (1), 84-94. 学芸堂

- テーマにしたTMTの新しい論文がオクスフォード大学出版社の『宗教心理学のハンドブック』に掲載される予定であるが、本稿執筆時点では未刊行。Greenberg, J., Landau, M. J., Solomon, S., and Pyszczynski, T. (in press) "The case for terror management as the primary psychological function of religion," in D. Wulff (ed.) *Handbook of the psychology of religion*, London: Oxford University Press.
- 11 Vail III et al., op. cit., p. 85.
- 12 Ibid., p. 84.
- 13 Jonas and Fischer 2006, p. 554.
- 14 Pyszczynski, T., Greenberg, J. and Solomon, S. (1999). "A Dual-Process Model of Defense Against Conscious and Unconscious Death-related Thoughts: An Extension of Terror Management Theory," *Psychological Review*, 106, 835-846.
- 15 Rosenblatt, A., Greenberg, J., Solomon, S., Pyszczynski, T., and Lyon, D. (1989). "Evidence for Terror Management Theory: I. The Effects of Mortality Salience on Reactions to Those Who Violate or Uphold Cultural Values," *Journal of Personality and Social Psychology*, 57 (4), 681-690; Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Rosenblatt, A., Veeder, M., Kirkland, S. and Lyon, D. (1990). "Evidence for Terror Management Theory: II. The Effects of Mortality Salience on Reactions to Those Who Threaten or Bolster the Cultural Worldview," *Journal of Personality and Social Psychology*, 58 (2), 308-318; Pyszczynski, Solomon and Greenberg, 2006/2003, 452a^o
- 16 Vail III et al. 2010, p. 85.
- 17 Pyszczynski, Solomon and Greenberg 2006/2003, p. 20.
- 18 Vail III et al., op. cit., p. 85.
- 19 Vail III et al., op. cit.
- 20 Norenzayan, A. and Hansen, I. G. (2006). "Belief in Supernatural Agents in the Face of Death," *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32 (1), 174-187.
- 21 Vail III et al., op. cit., p. 86.

- 22 Friedman, M. and Rholes, W. S. (2007). "Successfully Challenging Fundamentalist Beliefs Results in Increased Death Awareness," *Journal of Experimental Social Psychology*, 43, 794-801; Friedman and Rholes 2008.
- 23 Friedman and Rholes 2008.
- 24 Ibid, p. 50.
- 25 Vess et al., op. cit.
- 26 Vail III et al., op. cit.
- 27 詳細は拙稿「近年の心理学理論における死と宗教——恐怖管理理論の批判的考察」、九〇〜九二頁参照。
- 28 Berman, A. L. (1974). "Belief in Afterlife, Religion, Religiosity, and Life-Threatening Experiences," *Omega*, 5, 127-135.
- 29 Feifel, H. and Branscomb, A. B. (1973). "Who's Afraid of Death?" *Journal of Abnormal Psychology*, 81, 82-88.
- 30 Feifel, H. (1974). "Religious Conviction and Fear of Death among the Healthy and the Terminally Ill," *Journal for the Scientific Study of Religion*, 13, 353-360.
- 31 河野由美 (2000) 「大学生の宗教観と死観及び死の不安に関する計量的研究」『飯田女子短期大学紀要』、五月、第一七集、七三〜八七頁。
- 32 Martin, D., and Wrightsman, L. S. (1965). "The Relationship between Religious Behavior and the Concern about Death," *Journal of Social Psychology*, 65, 317-323.
- 33 Kahoe, R. D. and Dunn, R. F. (1975). "The Fear of Death and the Religious Attitudes and Behavior," *Journal of the Scientific Study of Religion*, 14, 379-382. 外発的動機のある宗教者とは宗教に関わることによって社会的な地位や経済的な利益を得ようとする者、また自民族主義の傾向を示すか人種的偏見を持つ者のことである。一方、内発的動機のある者は、精神的な成長や他人への奉仕をより重視し、他の宗派や宗教に許容的である。Allport, G. W., and Ross, J. M. (1967). "Personal Religious Orientation and Prejudice," *Journal of Personality and Social Psychology*, 5 (4), 432-443 参照。
- 34 Spilka, B., Stout, L., Minton, B., and Sizemore, D. (1977). "Death and Personal Faith: A Psychometric Investigation," *Journal for the Scientific Study of Religion*, 16, 169-178.

- 35 Feifel, H., and Nagy, V. T. (1981). "Another Look at Fear of Death," *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 49 (2), 278-286.
- 36 Thorson, J. A., and Powell, F. C. (1990). "Meanings of Death and Intrinsic Religiosity," *Journal of Clinical Psychology*, 46, 379-391.
- 37 Alvarado, K. A., Temple, D. I., Bresler, C., and Thomas-Dobson, S. (1995). "The Relationship of Death Variables to Death Depression and Death Anxiety," *Journal of Clinical Psychology*, 51 (2), 202-204.
- 38 Roff, L. L. et al. (2002). "Death anxiety and religiosity among Lithuanian health and social service professionals," *Death Studies*, 26 (9), 731-742.
- 39 Al-Sabwah, M., and Abdel-Khalek, A. (2006). "Religiosity and death distress in Arabic college students," *Death Studies*, 30 (4), 365-375.
- 40 Alexander I. E., and Alderstein, A. M. (1965). "Death and Religion," in H. Feifel (ed.), *The Meaning of Death*, (pp271-283), New York: McGraw and Hill.
- 41 Power, T. L., and Smith, S. M. (2008). "Predictors of Fear of Death and Self-Mortality: An Atlantic Canadian Perspective," *Death Studies*, 32 (3), 253-272.
- 42 Dezutter, J., Soenens, B., Luyckx, K., Bruyneel, S., Vunsteenkiste, M., Duriez, B., and Hutschaert, D. (2009). "The Role of Religion in Death Attitudes," *Death Studies*, 33 (1), 73-92.
- 43 Vail III et al., op. cit., p.88.
- 44 Vail III et al., op. cit., p.86. Osauchuk, M., and Tatz, S. J. (1973). "Effect of Induced Fear of Death on Belief in Afterlife," *Journal of Personality and Social Psychology*, 27, 256-260; Ochsmann, R. (1984). "Belief in Afterlife as a Moderator of Fear of Death?" *European Journal of Social Psychology*, 14, 53-67.
- 45 Goodman, L. M. (1981). *Death and Creative Life - Conversations with Prominent Artists and Scientists*, New York: Springer; Neale, R. E. (1973). *The Art of Dying*, New York, London: Harper and Row; Choron, J. (1963). *Death and Western Thought*, London: Collier-Macmillan; Murphy, G., (1965/1959). "Discussion," in Herman Feifel (ed.), *The Meaning of Death* (pp. 317-340). New York, London, Sidney, Toronto: McGraw-Hill ㄱㄴㄹㄺㄻㄼㄽㄾㄿ

46 例 ²³⁶ Hoelter, J. W. (1979), "Multidimensional Treatment of Fear of Death," *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47 (5),

996-999, Murphy, G., op. cit. ²³⁷ 参照。

47 Edmonson et al., op. cit.

(イーリヤ・ムスリン／Iija Muslim 東京大学大学院宗教学科博士課程)

Death and Religion in the Terror Management Theory: Is Religion an Anxiety Buffer?

Ilja Musulin

This paper examines the latest research on religion conducted within the framework of the Terror Management Theory (TMT) which has over the past 25 years produced a large body of work relevant to the study of human motivation and culture. From the standpoint of religious studies and with a view to contributing to the development of death and life studies which are currently being systematized in Japan, this paper analyzes the overall concept of religion in the TMT and its approach and results in studying the link between death anxiety and religious beliefs. The paper concludes that in recent years TMT researchers have made progress in theoretically solidifying their approach to religion, and have started to take active steps to address the long-standing lack of empirical studies on religion by TMT, so as to produce a more refined outlook on religion. However, their work remains insensitive to the possibility that certain doctrines and beliefs may induce the very anxiety regarding death they are supposed to assuage. The paper calls for a better understanding of doctrinal diversity; cultural and personal differences in the reception of religious teachings; thorough examination of previous empirical studies on death anxiety and religion which present conflicting results with those of TMT; as well as more consideration for the multidimensionality of death anxiety.

Key words: religion, death anxiety, psychology of religion, Terror Management Theory